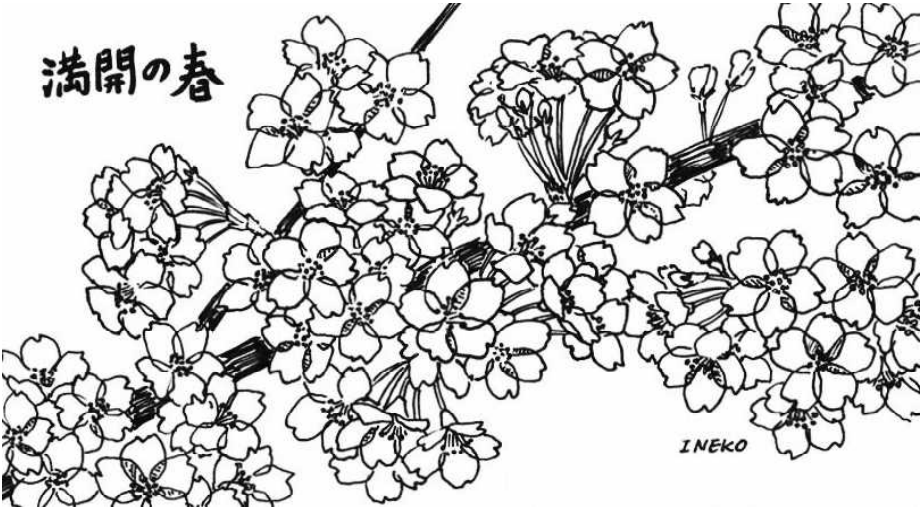
２００８年４月１５日発行（隔月刊）

う羽化か

ISSN1880-8646
2008年4月
第　６７　号

横浜漢点字羽化の会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105　Tel 045-641-1290
発行責任者　代表　岡田健嗣
編集責任者　木下和久



目　次

漢点字の散歩（６）　（岡田健嗣）　……　1
点字から識字までの距離（63）（山内 薫）　……　6
一　言　（岡田健嗣）　……　8
酔夢亭読書日記（25）　（酔夢亭）　……　10
見果てぬ夢を（10）　（山本優子）　……　11
第11回「学習会報告」（菅野良之）　……　15
第12回「学習会報告」（菅野良之）　……　16
漢文のページ　……　17
漢点字講習用テキスト（初級編・第８回）　……　20
ご報告とご案内　……　22
編集後記　（木下和久）　……　23

漢点字の散歩（六）

岡田　健嗣

四　言葉に出会う

①原点

幾度も述べたことだが、私の学業は大半を盲学校で修めた。そこでは学業の基本、日本語表記の基本の〈漢字〉とその使用法は教わらなかった。二十九歳に至って初めて〈漢点字〉に出会って、〈漢字〉の世界に触れることが叶ったのである。このようにして私は、〈漢点字〉を学ぶことで人生を救われた。

こういう言い方はいかにも仰山で、ばかばかしく受け留められるに違いないし、他人の口や筆からそのような言葉を聞けば、私もそう感じるに違いない。がそのようにしか言えないのはどういうことか、常に考えは行き戻りする。ひょっとしたらこのばかばかしさこそが恐るべき相棒で、〈漢点字〉との邂逅がなかったならば、その代わりに私の人生を充たしたものだったのかもしれない。だからいつもこの原点の周辺を、私は立ち去れずにいるのだろうか？そんな思いを抱いているのである。

〈漢点字〉との出会い以前を、実はなかなか思い出すことができないでいた。勿論幼少時の思い出はある。盲学校の学童・生徒であったころの思い出もある。私の周辺の出来事を思い出すこともできる。しかしそのとき、何を感じたか、何を考えたかとなると、だんだん模糊として来る。

私が自身の感官で受け止め、理解し、考えることをした記憶を遡れるのは、二十歳のときに社会へ出たころになってしまう。生まれて二十年の大半を盲学校という社会に生活し、その規範と習慣に守られて育ってきた。確かにそれはその意味で、大変幸福なことであった。ともかく成人したのである。そして恐らくその成長の間に享受した性行は、現在の私をも、根本のところで大きく支配しているに違いない。私の思考と言行の原理を形作っているに違いないのだ。その意味で盲学校に生活していた私達は、恵まれていたと言っても過言ではないはずである。しかし〈漢点字〉との出会いなしには、「考える」よすがさえ所有できない人生に終始したかもしれないという思いは、やはり拭えない。恐ろしいほどである。

二十歳の時に社会に出て、何にたじろいだのだろう

か？原点はそこにある。

盲学校時代の私は、その大半を視覚障害者に囲まれて生活していた。家族以外は、視覚障害者が織り成す学校という特殊な社会である。そこでは一応の学習という課題をこなすことになっていて、宛がわれた「勉強」をしたのだが、それが、盲学校の生活が私の感官に働きかけた全てであり、思考の素材の全てであった。

私が出て行った一般社会は、そのような盲学校の原理では動いていなかった。全てが『言葉』によって形作られ、『言葉』によって思考され、『言葉』によって行為されていた。アカデミズムや法曹や、政治や行政や、メディアや商取引の高度な言語活動ばかりでなく、極めて生活に密着したコミュニケーションの現場でも、『言葉』が大きなウェイトを占めていたのであった。それが一般であった。

一つの例を挙げてみよう。

私がそのころ就職したところには、先輩・同輩に、若い女性が大勢いた。若い女性たちはよくおしゃべりをした。彼女たちはそのおしゃべりで、互いの関係を滑らかにしているようであった。芸能人の話題が大半で、流行歌もよく口ずさんでいた。

流行歌の歌詞はどれも似たり寄ったりと私には思われたが、ちゃんと覚えて歌うとなると、案外容易ではなかった。勿論節を付けるのだから、音の高低やリズムや息継ぎなど、結構な修練を要した。さらに困難だったのが、歌詞である。勿論歌を歌うだけなら、ごまかしは利く。だがその前後である。歌詞には「女、男、妻、夫」を「ひと」と読ませる類の文字遣いが頻出する。当て字と言えば当て字なのだが、これが皆さんに大変受ける。ところが私はその話に乗ることができない。「他人」と書いて「ひと」と読ませるのは一般である。だが「函館の女」を「ひと」と読ませるのは、作詞者の意図である。

〈漢字〉をどう読ませるかは、基本的に任意である。読ませたいように読ませればよろしい。しかしこれには、読み手の〈漢字〉の知識を要求しているという条件が付く。

流行歌一つばかりなら大丈夫、任せて欲しい。何とかこなして見せましょう。が世の中それほど甘くはありませんでした。

一般の多くの会話には、気づいておられる方は少ないようだが、「それどんな字書くの？」という言葉がよく使われる。私もともかく教育を受けて成人したの

であるから、当然それに答えなければならない。だが〈漢字〉を知らない。むにゃむにゃ分からぬことを言う。それが何回か繰り返されれば、そのような質問はされなくなる。同時に他の話題からも遠ざけられる。

こんなこともあった。

私は鍼灸師である。盲学校でその勉強をし、資格を取った。鍼灸の勉強の基本の一つに、「漢方医学」というのがある。「漢方」であるから中国から渡来した医学である。従ってその理論は〈漢字〉で記述されている。私達はそれを易しい日本語に訳されたしかもカナ点字で表された教本を使って勉強した。

鍼灸で使う治療点（つぼ）を、「経穴」という。その経穴には一つ一つ名前が付いている。勿論その名前も全て〈漢字〉で表される。その読みも全て音読みである。「中府、雲門、天府、侠白、尺沢、孔最、列欠、経渠、太淵、魚際、少商」（手の太陰肺経）から始まり、三六〇個を越える数を覚えなければならない。こうやって本来の漢字で書いてみると、こんな勉強も案外面白いかもしれないと思うのだが、これをカナだけで読まされたらどうか？そんな風に勉強していたのである。

あるときある点字図書館で、親しくなった職員から、「漢方の本ができてきたんですよ。ラベルを貼りたいのですが、ケイケツのケイは経でしょうが、ケツという字はどんな字か見当が付かないのです。」と言われた。私は「穴」と答えられなかった。このような会話が、何時でも何処ででも繰り広げられているのである。

このようにして〈漢字〉を知っているか知らないでいるかが、人（健常者）と人（視覚障害者）との間の隙間を広げているのである。私の場合はそうであった。

②意識

本会の活動を続けていて、何回か人の前で、〈漢点字〉のお話をさせていただいた。このような機会をお与え下さった皆様には、厚く謝意を表したい。

ある会の後、お聞き下さった方々の感想が届けられた。好意的に受け止めて下さる方が多かったのだが、中に「リテラシーが違うのか、（岡田の）勝手な言い分が目立って、好感が持てなかった。」というものと、「興味深く聞いたが、異文化の視覚障害者を理解するのは難しかった。」というものがあった。前者の

「リテラシー」というのは、後者の「文化」と同義なのかもしれないと理解して、実に面白い、正直な反応だと感心した。どうやらこの社会では、世の福祉の理念、「視覚障害者は目が見えないだけ、聴覚障害者は耳が聞こえないだけ、一個の人格としては健常者と何の変わるところはない」という捉え方は、あまり為されていないように見える。むしろ個人主義の極限か、グローバリゼーションの進行に伴う社会格差を享受してか、そもそも人それぞれ違う、まして健常者と障害者は別物だとする捉え方が一般である姿が見えて来た。

今年初めに漢点字使用者の間で、昨年暮れに発行された、日本漢点字協会の機関誌「新星通信」に掲載された、私の「点字の漢字は〈漢点字〉」という拙稿が話題になった。その焦点は何かと言えば、もう一つの「点字の漢字」と自称している「六点漢字」について、「読めないものは文字ではない」と私が書いたことへの憤懣のようであった。

私は「〈漢点字〉は触読を目的に川上先生が考え出された点字の漢字体系だが、六点漢字は、触読には適さないものだ。」と書いた（本誌『うか』六三号、二〇〇七年八月）ことが、〈漢点字〉と「六点漢字」の両者を使用しておられる方々の批判を浴びたのである。川上先生は生前から〈漢点字〉を、ブライユの触読文字開発の延長線上に位置づけておられて、いかに触読に適った、しかも〈漢字〉の構成を反映した体系を構築するかに苦心されて来られた。そして「点字の漢字と呼べるのは、〈漢点字〉だけ」という確信を持たれるに至った。私は本会の活動を通して、それを私なりに検証して来た積もりで、今回の主張となった。

なぜにあのような批判を、漢点字使用者の諸君から受けなければならなかったのか、今も理解に苦しんでいる。ただ言えるのは、あのような指摘、「六点漢字も触読できる」と主張する彼らは、「六点漢字」も使っている人たちなのであって、〈漢点字〉も、彼らにとっては「六点漢字」を使用する程度にしか使用していないらしいと言えることである。そうであれば確かに、〈漢点字〉を使うか、「六点漢字」を使うかは、「好みの範疇」だと言われてもおかしくはない。が彼らは、これまで私と本会の会員が行ってきた活動には関心がないという。

本会の活動は一九九六年に始まった。先ず手掛けた

のが、『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）の製作であった。横浜国立大学教授・村田忠禧先生のご尽力と、学習研究社様のご理解によって、ソースデータをご提供いただいて製作した。そのために最も力と時間のかかる入力と校正という工程を免れることができた。全九〇巻という大部を、大変な短期間で完成させることができたのは、このような事情によるとともに、何と言っても木下さんを中心とした、会員挙げての協力体制の力が為した成果である。

その後も本会では、数々の漢点字訳書を送り出した。が今回の批判者諸君は、このような本会の活動には関心がないという。彼らは関心がなくとも、私どもは〈漢点字〉でなければ触読文字で表された書物とは言えないものを、今後も作り続ける積もりである。

現在東京漢点字羽化の会では『日本語大博物館』（紀田順一郎著、筑摩文庫）の漢点字訳に着手しようとしている。横浜漢点字羽化の会では、既にご紹介しているように、『常用字解』（白川静編、平凡社）の完成を目指して編集作業が急ピッチに進められている。

もう一つ、辞書と単行本以外の活動からの成果としては、私と木村多恵子さんのために、放送大学の印刷教材の作成が挙げられる。我が国の古典、記・紀・万葉、王朝文学、平家物語等中世・語り物文学が、手の届かないものから、ぐっと身近なものに変わった。このような経験は正しく〈漢点字〉のお陰で実現したものである。

ノーマライゼーションという理念がある。社会福祉の分野では、社会に暮らす人々全てを社会の構成員と受け入れて、皆が権利を認め合える社会を作ることを言うという。障害者や外国人や、その他差別の対照となって来た人々を、社会の構成員の一人として受け入れられる社会に、社会自体を変えて行こうというのである。

しかし今見たように、障害者を「文化が違う」と見たり、「あなたには関心はないが当方の言うことを認めなさい」と言ったり、理念とは現実ではないから理念なのだという真実を、思い知らされる思いであった。

（続く）

＊次回からは、『常用字解』を引用しつつ考えて行きます。

点字から識字までの距離（六三）

山内　薫（墨田区立あずま図書館）

情報化時代に対応する漢字政策

文化庁の文化審議会国語分科会に漢字小委員会という委員会がある。この委員会は今後の国語政策として取り組むべき最重要課題の二つの内の一つ、「情報化時代に対応する漢字政策のあり方」について検討するために二〇〇五年に設置された。（ちなみにもう一つは「敬語に関する具体的な指針作成」）国語分科会は新たな漢字政策が必要とされる理由として、①現在の漢字使用の目安である常用漢字が情報化の進展が著しい現在十分に機能しているかどうか検討の必要がある、②漢字を手で書く機会が極端に減ってきている現在、漢字を手で書くことをどのように位置づけるかの二点をあげている。

事実、文化庁が毎年実施している国語に関する世論調査でも「パソコンや携帯電話などの情報機器の普及によって、言葉や言葉の使い方が影響を受けるのではないかという意見がありますが、あなたはどう思いますか。」という設問に対して七八・九％の人が影響があると回答している。（平成一五年度調査）この八割近くの回答者にどのような影響があると思うかと問うたところ実に六〇・九％の人が漢字が書けなくなると回答している。一方で漢字に対する意識調査では七一・〇％の人が「漢字は日本語の表記に欠くことのできない大切な文字である」、六〇・六％の人が「漢字を見るとすぐに意味が分かるので便利である」と回答している。（平成一四年度調査）パソコンなどで使うことのできる漢字の数も、常用漢字およそ二千字に対して、現在ワープロなどに搭載されている漢字は六千三百字（ＪＩＳ第一・第二水準）とほぼ三倍を超え、さらに近い将来多くの情報機器が一万字を超える漢字（ＪＩＳ第一～第四水準）を搭載すると予測されている。

そこで、常用漢字以外の漢字の使用について「常用漢字表にない漢字であっても、積極的に使っていくべきである」か「むずかしい漢字も使われるようになるので、余り望ましいことではない」かどちらの考えに近いかを問うたところ、前者が四二％、後者が三二％と使用推進派が十ポイント上回るという結果が出ている。（平成一五年度調査）

平成一六年度調査では「七つの例文を挙げて、手書きの場合とパソコン・ワープロ等を使って書く場合に、平仮名で表記するか漢字で表記するかを尋ねてい

る。七つの例文の内「朝の九時頃」の「頃」、「誰ですか」の「誰」、そして寝具の「枕」の三語は、ほぼ手書きが八割、パソコン・ワープロ等では九割が漢字を使っている。「挨拶」と「育む」では手書きの半数が漢字であるのに対してワープロだと八五％が漢字を使っている。残る二つ「顰蹙を買う」の「顰蹙」と「齟齬を来す」の「齟齬」はどちらも手書きではわずか五％前後の人が漢字を使うのに対してワープロでは三割近くが漢字を使っている。いずれもパソコンやワープロ等を使う場合に漢字の使用率は上がり、むずかしい字になればなるほど手書きより使用率が上がることが分かる。（手書きの「顰蹙」では一一％、「齟齬」では二〇％が分からないと回答しているので、この一～二割の人にとって書き言葉のカタログの中にこの二つの言葉がもともと存在しないと見ても良いだろう）

こうした結果を見て二〇年近く前のことを思い出す。当時、図書館を利用している視覚障害の利用者が点字ワープロで初めて打った原稿を添削してほしいと点字毎日の記事を墨字に訳した原稿を送ってきたのだが、漢字の間違いなども散見される他、何よりも漢字が多く、普通は仮名で書くような言葉も漢字があればすべて漢字を使うという感じだった。

さて、携帯端末の契約数が既に一億台近くになり、携帯電話の世帯普及率も九割を超え、インターネット利用人口も八千五百万という現状の中で、仮名入力による仮名漢字変換が書くことの中心になっていくため、漢字は「書く」から「選ぶ」時代に突入したと言ってもよいだろう。しかし「書く」と「選ぶ」では、使用する脳の機能や活動が異なり、漢字の学習や記憶には視覚とともに手先の運動が係わって初めて書けるのだが、パソコン入力が普及すれば書ける漢字と読める漢字がますます乖離するだろうと思われる。もともと漢字は手で何回も書いて覚えたものであり、漢字を思い浮かべるときにも脳の運動神経系が活動しているという。そこで小委員会の委員の中には「書ける字、書けなくても読める字と、様々なレベルの漢字があっていい、という方向で考えてはどうか」という発言も見られる。

この漢字小委員会は二〇〇五年九月からほぼ月に一回開催されており、五・六年後をメドに常用漢字を見直すという。まだ漢字を手で書くことの位置づけについては余り検討されていないが、情報化という言葉に振り回わされずに脳の働きなどとの関連でじっくりと漢字の問題に取り組んでもらえたらと思う。（今回の記事は文化庁のホームページ上に公開されている文化審議会国語分科会漢字小委員会の議事録と配付資料を参考にしました）

一言

職業選択の自由（？）

岡田健嗣

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

【福祉機器の利用者として】：　私は、社会福祉の勉強をしている視覚障害学生です。また、鍼灸師として、障害者の移動支援事業者として働いています。二つの要点がＮＨＫ学園での勉強を支えてくれています。一つ目は、パソコン環境が発達して普通の文字が書けるようになり、メール通信が可能になったことです。もう一つは、教材を電子データで提供いただき、メール送信によるリポート提出ができる点です。前者は技術の発達が、後者は学園の理解が実現の原動力です。

パソコン操作は、画面を音声で読み上げるスクリーン・リーダーと呼ばれるソフトウエアを頼りに行なっています。ただし、一般のアプリケーションに対応していないため、事務職をこなすことが出来ない点は課題です。

なお、点字には漢字がありませんでしたが、一九六九年に漢点字が発表され、パソコンからそのデータを送出して読むことができるようになりました。私自身も漢字仮名交じりで勉強しています。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

以上は、現在私が社会福祉の勉強をしているＮＨＫ学園の機関誌「ＣＳ通信」に書かせていただいたものです。学園のご了承を得て、全文を引用させていただきました。

執筆ご依頼の趣旨は、視覚障害者である私が、福祉機器を如何に使用しているかをご紹介するものでした。残念ながら私は、パソコンは決して上手ではありませんし、詳しくもありません。そのために、私的にはかなり満足した使い方をしていますが、公的には、恐らく落第点をもらう程度の使い手に違いありません。しかし高度なパソコンの知識や技術を持っていなければ福祉機器を使っているとは言えないとすれば、私ばかりでなく大半の障害者が、落第点をもらうことになるでしょう。

ご依頼の趣旨は、もう一歩踏み込んでもいました。福祉機器が、視覚障害者の社会生活、とりわけ職業にどのように生かされているか、現状と展望にも触れて欲しいというものでした。

またも残念ながらそれにもほとんどお答えできませんでした。パソコンを職業に生かすとしても、求めるものは何か（？）が分かっていなければ、使えるかど

うかさえ分からないからです。そこで視覚障害者が職業に就いたとき、何をしなければならないか、何ができるかについて考えてみたいと思います。

私は現在、視覚障害者にとって伝統的な職業である、鍼灸マッサージ業で口を糊しています。しかしこのような伝統も、既に力を失っているように見えます。他の分野の経済活動、たとえば各地に繁栄していた商店街が、揃ってシャッター街となりつつあるように、鍼灸マッサージ業も、世の中から求められるものが変化して、事業内容や経営方針が大きく変わって来たのです。業界を構成する従事者に占める視覚障害者の割合も年々小さくなって来ていて、資本の参入も頻繁になっています。

私が就業したころのこの業界は、伝統的な経営の行われていた最後に当たると思われます。当時までは誠に単純な、「1＋1＝2」が通用していて、経営者も従業員も基本的には区別ない仕組みの事業者が一般でした。経営者は施術所を運営しますが、従業員も雇用関係の形は採っていても、実際は個人営業者として施術所の一角を借りて営業していたという理解も可能でした。それが資本の流入や世の中のニーズの変化によって、どのようにして視覚障害者が追われることとなったかを考えるのは、恐らく無駄ではないはずです。

しかも視覚障害者の鍼灸マッサージ業離れもありました。就業の範囲も広がっていて、多くの職種に就くようになりました。可能性を追求し広げるという意味では、大変結構なことと思われますが、極めて限られた人の就業に留まっているのも事実です。

そこで立場を代えて、視覚障害者に働いてもらう方面から見てみましょう。

私は三年前に、障害者自立支援法にもとづく障害者の外出支援を業とする会社を立ち上げました。極小規模の会社です。

そこで進められる「仕事」と呼ばれる一連の作業を観察して見ると、あることが分かりました。当然のことではありますが、会社は一人一人の個人営業者の集まりではありません。従業員一人は一つの「仕事」を、別の従業員は別の「仕事」をこなします。それぞれがこなす「仕事」を総合し組み立てることで、会社組織の目的である営業が成り立ちます。そして一人一人がこなす「仕事」というのが、突き詰めると「動く」ことと「読み書きする」ことでした。「動く」ことと「読み書きする」ことをどのように結び付けるかが、経営者・管理職・従業員の能力とティームワークに期せられます。弊社のような極小規模の事業者をモデルに数式にすると、「1＋1＞2」ということになります。二人集まったら二人分ではいけません。一人

一人が別のことをやる。そのようにして二人集まると、全てを一人でこなした場合の三人分、四人分の量と質の「仕事」ができる。これが会社の志向する業務です。一人一人がそれぞれに担う「仕事」があって、その総合で会社の生命力が生まれる。

近年鍼灸マッサージ業もこのような波を被っています。視覚障害者の就業率が低くなっている理由の一つがここにあるのは明らかと思われます。

一昨々年施行された障害者自立支援法には、障害者が組織の一員として、一つの「仕事」を担いつつ、他の一員の「仕事」と結びついて、より大きな力を発揮するための策は、残念ながら盛り込まれていません。何時でも何処へでも、必要な時に必要な所へ出かけて行く、必要な文書を読み、必要な書類を作成する、そして現在では事務作業のほとんどがインターネットを介して処理されます。これだけの作業を、経験や情報にもとづいた判断力を働かせつつこなすことが求められるとともに、売り上げに占めるコストを、可能な限り少ない水準に押さえたいというのが事業者のニーズです。このような条件を満たしつつ障害者の就業を実現することが、障害者の社会参画なのではないか、私にはそう思われてなりません。あるいは全く別の発想、残念ながらどちらもまだ提出されてはおりません。

酔夢亭読書日記（第25回）

酔夢亭

某月某日。

方丈の仕事場が、本や書類やその他がらくたやらで二進も三進もいかなくなってきた。その場その場で処理していかないからこうなることは分かっているのだが、根が呑気で快楽主義者だから、なかなか思ったようにはいかない。一点突破的に目の前にある仕事や書類を集中的に片づけていけばどうということもないのだ。あっちに色目を使い、こちらでにこにこ笑い、頭のなかはよからぬ妄想に満たされていたりするから仕方ない。電話が鳴り、携帯がぶるぶる震えている。フアクスも入ってきた。あーもういやだ。書を捨てよ、遊びに行こう。で、ますます散らかしっぱなしになってしまうのである。

「読書の整理学」紀田順一郎（朝日文庫）。本に関しての情報収集と整理の仕方を伝授してくれる。散らかし放題の頭を整理するためには有用である。２０代の始めの頃、酔夢亭も図書の分類整理の仕事をかじったことがある。職場は地味で、細かなことにこだわる

先輩諸氏が大勢いて、波瀾万丈を夢みる人間にとってはおもしろいものではなかった。細部の重要性、その大切さが分かるのが職人の世界。一芸に秀でるためには日々飽きることなく同じ動作なり、稽古なり、しきたりなどに従わなければならない。分かっているんだけれどなあ。

某月某日。

胃が痛くなったので、医者に診てもらった。胃の後ろの背中も痛む。ゲップが多発する。ついに我が体内にもエイリアンが侵入したかと思ったが、処方された消化薬を何日か飲んでいるうちにけろりと痛みがなくなった。単純すぎて笑ってしまった。ピロリ菌も基準値以下でめでたし。

「生物と無生物のあいだ」福岡伸一（講談社現代新書）。「生命とは何か？それは自己複製を行なうシステムである」と単純に考えて良いものか、どうか。そして、筆者は「生命とは動的平衡にある流れである」という結論に到達する。生命はさらさら流れる砂の城でありながら、城の形を維持している。ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず、のように分子は流れていき、一年も経てばわたしたちは分子レベルではもとのわたしたちではないということらしい。脂肪組織だって「驚くべき速さで、その中身を入れ替えながら、見かけ上、ためている風をよそおっている」のだ。

「いつまでもデブと思うなよ」岡田斗司夫（新潮新書）。一年で50キロの減量に成功したおたく学の泰斗の物語である。さらさらと脂肪組織が流れてゆくのが、目に見えるようだ。入るを制して、出るを図る試み。福沢諭吉が親の仇のように嫌った「家柄主義社会」から「学歴主義社会」、「ブランド主義社会」へ、そして今「見た目主義社会」が到来したと筆者はみるのである。

わたしも20代のころの体重に戻そうと少しばかり心がけていて、徐々に成果は現れている。身も心も軽快に、ってことで。

以下次号

見果てぬ夢を（十）

山本優子

十二　恵子（承前）

かつは、まるで孝之進に一言も話させまいとするかのように一方的にしゃべった。恵子に関する詳しい事情がようやく孝之進たちにわかってきた。山口県で生

まれてまもなく事故で両親をなくし、ブラウン宣教師夫人というアメリカ人に養育されてきたこと、二歳の時、病気にかかり、両眼の視力を失ったこと、宣教師一家が兵庫に移るにあたり、伴われてきたこと。ここ兵庫でブラウン夫人は遠縁にあたるとされるかつを探し出したこと、宣教師一家は帰国することになり、恵子を進藤家で養育してほしいと頼んできたことなどを一気にしゃべった。

「ブラウンさんはアメリカから養育費を送るから面倒みろいうて、無理やりうちとこに押しつけはったんですわ」

孝之進は、ため息をついた。かつは、孝之進が快く受け取っていないのを感じたらしく、あわただしく言葉をつけ足した。

「その養育費、毎月四円やいうことなんですけど、そっくり訓盲院に払うてもええですから、頼みますわ」

月額四円もの養育費がアメリカから送金されるという話に孝之進は驚いた。牧師一家の給料が五円から六円だった時代である。孝之進は、考え考え言った。

「ここは孤児院ではありません。学校です。恵子ちゃんにふさわしい教育を受けさせたいということなら、入学を許可しましょう。養育費の中から、学費だけ、お支払いください。けれど、孤児としては、引き取れません」

「あの子は見えへんし、ろくにものは言われへんし、考える頭なんか、ありませんわ。その上しょっちゅう熱はだすわ、発作はおこすわ……教育どころちゃいます」

「教育の機会を与えることで、可能性が出てくると、私どもは信じていますので……」

「先生が教育する言いはるんやったら、やってもうてもええんですけど、引き取ってもらわな困るんですわ」

孝之進は、こみあげてくる怒りを抑えながら、丁重にかつに説得しようと試みた。が、かつは孝之進の語ることが全く耳に入らないようで、引き取ってくれと繰り返すだけだった。部屋を出たり入ったりしながら話を聴いていた増江がとうとうたまりかねたように口をはさんだ。

「引き取らせていただいたら、いいんじゃないの」

「いや、できない。訓盲院が孤児院であるというような前例を作ることは、盲教育の根本を揺るがすことになる」

孝之進は、きっぱり言った。話し合いは平行線が続き、とうとう孝之進は、

「いくらおっしゃっても、できないことはできません。お引き取りください」と、立ち上がった。

かつは、帰り際に捨てぜりふのように言った。

「先生らは同情深い立派な方たちやと聞いたから来

てみたのに。引き取ってくれはらへんのやから、恵子がどないなっても、知りまへんで」
孝之進は、鉛のような気持ちを抱えて、かつを見送った。横で増江がつぶやいた。
「初めはなんてひどい女だろうと思ってたけど、かわいそうになってきたわ。いつまでもくだくだ言って帰ろうとしなかったのも、自分の話に耳を傾けてくれる人が欲しかったからじゃない？」
「かわいそうなのは、かつより恵子という子だよ」
孝之進は、唇をかみしめて言った。
「わたし、恵子ちゃんがこれからどうなるか、心配だわ。ねえ、中山手通に教会員の渡辺さん一家が住んでいるわね。恵子ちゃんのこと、祈っていただいて、定期的に様子をうかがってくれるように頼んでみましょうよ」
「その必要があるな」
孝之進は、うなずいた。
そして、増江と共に「主よ、恵子への最善の助けの道を開き給え」と祈り、すぐに増江に口述して渡辺一家に恵子の件依頼の手紙をしたためた。そして、その日治療を受けに来た教会員に渡辺家に手紙を届けてくれるよう頼んだ。
手紙を読んだ渡辺夫人は衝撃を受けたらしく、さっそく翌朝訓盲院を訪ねてきて、これからかつの家を探して訪問すると約束した。孝之進夫婦と渡辺夫人は、
「恵子にふさわしい助けと守りが与えられるように」
と、祈りあった。
その翌日、血相を変えた渡辺夫人が訓盲院に飛び込んできた。
「昨日は何度進藤家の戸を叩いても、夜遅くなっても、誰も帰ってこなかったんですよ。恵子という子はどこにいるのかと気になって……けさ、もう一度進藤家に行ってみたらですね、中から泣き声が聞こえてきたんです。尋常じゃない泣き方だと思って戸を叩き続けたら、かつという女が出てきました」
「それで？」
増江が、心を乱し始めている声を出した。
「かつに、あの泣いてるのは誰かと尋ねると、何でもないと言う。でも、放っておけないと思って、お手洗いを使わしてもらうふりをして、上がりこんで泣き声がする方に行ってみたんです」
渡辺夫人は、急に涙声になった。
「わたし、あんなひどいのを見たことがありませんわ。泣き声のする部屋のそばに行くとすごい臭いなんです。ふすまを開けてみると、裸同然の小さい子が足をくくられて、狭い部屋にひっくり返ってたやないで

すか」
増江が叫んだ。
「そ、それでどげんしたとですか」
「かつが、走ってきて、なんで勝手にここを開けるんや、言うもんですから、こんなことをずっとしてきたんか、すぐ巡査を呼びに行く、言いました。そしたら、かつは、見えへんとか聞こえへんとかの子らはみんなこうやって家の中で守ってもろてるんや。交番に行ったかて、あんたが笑われるだけや、言いましてね、とにかく先生に知らせなと思って、ここに来たんです」
孝之進は、きっぱりと言った。
「ぐずぐずしていられない。すぐ進藤家に行こう」
孝之進と増江が進藤家に着くと、かつは意外にも愛想よく迎え入れた。恵子を連れてきて、会わせさえした。恵子の髪はぼさぼさで身体は異臭を放っていた。古びた浴衣を着せられていて、足は縛られてはいなかった。かつに手を引かれて自分の部屋から客間まで歩いて来るにも、足を引きずっている。顔にも腕にもあざが見えた。その様子を増江に説明されなくとも、臭いと雰囲気で孝之進は恵子の日常を察した。そばにいる増江が、憤りを全身にみなぎらせているのを孝之進は感じた。
かつに何か言われる前に、孝之進は心を決め、静かに言った。
「増江、わたしは恵子を引き取りたい。訓盲院の院生としてではなく、わたしたちの養女にしたいのだが」
増江は、劇のせりふを言うかのように言った。
「いい考えだと思いますわ。今の養母さんのお気持ちしだいですけど」
かつは、驚いたようだった。が、満面笑みを浮かべて、孝之進たちにお辞儀をした。そして、孝之進たちの気が変わらないうちにと思ったのか、あわただしく恵子の持ち物をまとめにかかった。風呂敷包みをトンと増江の前におくと、何度も頭を下げながら恵子を伴わせて孝之進たちを送り出した。
「アメリカさんからの養育費も先生らにさしあげますよって」
と、さえ言った。
こうして、恵子は孝之進たちと暮らすことになった。一九〇五年（明治三十八年）十月五日、孝之進三十五歳の時だった。正式な養女とするには、役所との談判なども必要である。それには多少時間がかかるということで、当面恵子は進藤恵子として、進藤家の養女であり続けることになった。
（つづく）

第11回　漢点字　学習会報告

東京漢点字羽化の会　菅野良之

1　日時　平成20年2月23日(土)18：30～20：30
2　場所　ヒューマンプラザ7階　第1会議室
3　出席者：14名（氏名省略）
4　使用教材
「漢点字　講習用　テキスト　初級編　第一回（全十回）」点字編、墨字編
「レーズライター」（**分、日、性、心、口'、囲、十、止、必、才、正**）
5　学習会内容
（1）前回の復習
第一基本文字（一マス漢点字）（4）
「病」：病垂で表す漢点字は3マスになる場合が多い。
「行」：行構えの衡の真中の形は、牛の角を意味し、牛に車を轢かせる時の後頸にかける横木（＝くびき、頸木）。漢点字は魚を使う。
「店」：漢点字では广垂れ（＝麻）を表す。
「月」：三日月の形。
「肉」：冂（えん構え）に　人が2個入る。肉月を表す。
（2）今回の学習内容
ラ行の一マス文字　点字p97、墨字p34から
・リ（1・2・5の点）「分⠯」　音読みのブンは呉音、フンは漢音、ブは慣用音。
八頭や三角の屋根を表す。八頭は他に公。三角屋根は他に食・金があり、人頭（ひとがしら）も三角屋根を表す。
訓読みには2つの送り仮名が付く。音・訓ともに、いずれも意味は異なる。
・リ下がり（2・3・6）「日⠱」　音読みのジツは漢音、ニチは呉音、訓読みに「か」を追加する。原形は○の中に・
日偏：明、暗、昭、映、昨等。音及び書は曰（ひらび）で祝詞を入れる器からきたもの。
・ル（1・4・5）「性⠻」　音読みのセイは漢音、ショウは呉音。訓読みにはさがのほかに「たち」もある（広辞苑より）。立心偏として用いる。
・ル下がり（2・5・6）「心⠹」　音読みのシンは漢音及び呉音。
部首として下心：志、思、想、憇、慈、悶など。下心には忝や恭や慕の下の部分も云う。

・レ（1・2・4・5）「口⠿」　音読みのコウは漢音、クは呉音。祝詞を入れた器。
クを用いた言葉：口調、異口同音など。
・レ下がり（2・3・5・6）「囲⠿」　井桁を口（国構え）で囲ったもの。防備を意味する。国構えに用いる。音読みのイは漢音及び呉音。
・ロ（2・4・5）「十」　音読みのジュウは呉音。慣用音としてジッ、訓読みに「と」、「そ」がある（広辞苑）。
・ロ下がり（3・5・6）「止⠷」　音読みのシは漢音・呉音。止め偏として歩、武
〔近似文字〕
・ル下がり＋5の点　「必⠷」　「心」の近似文字。矛やまさかりの柄の部分を象ったもの。秘、密、泌など。音読みヒツは漢・呉音
・ロ＋4の点　「才⠷」　「十」の近似文字。目印に立てた木の形（常用字解より）
音読みサイは漢音。呉音にザイ（広辞苑）。
・ロ下がり＋1・2の点　「正⠷」　「止」の近似文字。征が元の字（常用字解）
音読みセイは漢音、ショウは呉音。

第12回　漢点字　学習会報告

1　日時　平成20年3月22日（土）18：30～20：30
2　場所　ヒューマンプラザ7階　第1会議室
3　出席者16名（氏名略）
4　使用教材
「漢点字　講習用　テキスト　初級編　第二回（全十回）」点字編、墨字編
「レーズライター」（**林、森、材、相、想、果、休、保、来**）
5　学習会内容
（1）前回の復習　ラ行の一マス漢点字と近似文字（テキスト第1回分は終了）。
「分」：訓読みの分けると分かるの二種が新鮮に感じた。点字のリに当たり、部首として八頭や三角屋根に使う。
「日」：リ下がり。
「性」：「心」の文字が縦に変化し、偏になったのが立心偏。点字のルに当たる。
「心」：ル下がりで、漢点字では部首として下心に使う。
「口」：神様を祭る器（白川先生）。レに当たり、部首として口偏に使う。
「囲」：城壁で囲み町を守る。（21ページに続く）

漢文のページ

長恨歌（2）

盛唐　白居易

春寒賜レ浴華清池
温泉水滑洗ニ凝脂ヲ
侍兒扶ケ起コスニ嬌トシテシ無レ力
始メテ是レ新タニ承クルニ恩澤ヲ時
雲鬢花顔金歩搖
芙蓉ノ帳暖カニシテ度ニ春宵ヲ
春宵苦シミレ短キヲ日高クシテ起ク
從レ此レ君王不ニ早朝セー

前号（冒頭）のすぐ後に続く節。美しく成長した楊家の娘は玄宗皇帝の離宮に召され帝の寵愛を一身に受ける。帝は以後政務を怠るようになった。

春寒うして浴を賜う華清の池
温泉水滑かにして凝脂を洗う
侍兒扶け起こすに嬌として力無し
始めて是れ新たに恩沢を承くるの時
雲鬢花顔金歩搖
芙蓉の帳暖かにして春宵を度る
春宵短きを苦しみ日高くして起く
此れ從り君王早朝せず

華清池＝天子の離宮である華清宮の温泉。
凝脂＝きめのこまかいつややかな白い肌。
侍兒＝侍女。　**恩沢**＝天子の寵愛。
雲鬢＝雲のようにふさふさと豊かな髪。
金歩搖＝歩くと揺れ動く金の髪飾り。
芙蓉＝はすの花。愛情の象徴とされる。
度ニ春宵一＝「度」は「渡」に同じ。春の宵を過ごす。
早朝＝皇帝は朝早く朝廷にでて、臣下を引見し、政務を執る決まりであった。

春　寒　ウシテ　賜　浴　ヲ　華　清　ノ　池

温　泉　水滑　カニシテ　洗　フ　凝　脂　ヲ

侍　兒　扶　ケ　起　コスニ　嬌　トシテ　無　シ

力

始　メテ　是　レ　新　タニ　承　クルノ　恩

澤　ヲ　時

雲　鬢　花　顔　金歩　搖

芙　蓉　ノ　帳　暖　カニシテ　度　ル　春

宵　ヲ

春　宵　苦　シミ　短　キヲ　日高　クシテ　起

ク

從　リ　此　レ　君　王　不　早　朝

参照図書：遠藤哲夫『語法詳解　漢詩』（旺文社）

玄宗皇帝（685～762年）
唐の第6代皇帝。
玄宗の治世の前半は開元の治と謳われ、唐の絶頂期となった。
後に楊貴妃を溺愛して政治への意欲を失い、宰相李林甫や、貴妃の一族楊国忠の専横を許し、安禄山の反乱を招くことになる。

玄宗

漢点字講習用テキスト

初級編　第八回

３　　複合文字　（１）　　（前回の続き）

３．漢数字および第一基本文字を部首とした文字　（３）

・「古」とそれを含む文字。

（３０）　　古⠩⠪⠪　　コ　　ふる - い　いにしえ

「十⠪」の下に「口口」を置いた形の文字です。古い、干からびた頭蓋骨、先祖の頭の骨を象った文字と言われます。古いもの、昔から継がれているもの、あるいは古い時代を意味します。漢点字では、「⠪　（口）」と「⠩　（十）」で表されます。本来の配置とは逆になっています。

「古来」「古典落語」「擬古文」「古今集」

（３１）　　苦⠨⠩　　ク　コ　　にが - い

にが - む　くる - しい　くる - しむ　くる - しめる

「草⠨冠」の下に「古⠪⠩」を置いた形の文字です。苦い味のする草を表していると言われます。味の苦さから、こもごもの苦しみまで、幅広い意味を含んだ文字です。漢点字では、「⠨　（草冠）」と「⠩　（古）」で表されます。「古⠪⠩」の「口⠪」が省略された形です。

「苦心」「苦難」「苦労」「艱難辛苦」「良薬口に苦し」

（３２）　　枯⠨⠩　　コ　　か - れる　か - らす

「木⠨偏」に「古⠪⠩」の形の文字です。木が年老いて、乾いて枯れることを意味します。漢点字では、「⠨　（木偏）」と「⠩　（古）」で表されます。「古⠪⠩」の「口⠪」が省略された形です。

「枯木」「枯死」「枯渇」「枯山水」

（３３）　　湖⠨⠨　　コ　　みずうみ

「さんずい」に「古⠪⠩」と「月⠨」の形の文字です。満々と水をたたえた〝みずうみ〟を意味します。漢点字では、「⠨　（さんずい）」に「⠨　（月）」で表します。「古⠪⠩」は省略されます。

＊　「古⠪⠩」と「月⠨」でできる文字は、ずっと後に、〝えびす〟の訓で出て来ます。古く中国の周辺にいた少数民族、あるいはペルシャの人を指したと言われています。ここの「湖⠨⠨」では、その音、〝コ〟を指す符号として、含まれています。

「湖水」「湖畔」「火口湖」「白鳥の湖」

・カタカナの〝ナ〟の形を、「十⠪」の形と見て、その右下に部首の入る文字三つ。一般にカタカナの〝ナ〟の形は、手でものを持つことを意

味します。
　（３４）　　有⠄⠛⠋　　ユウ　ウ　あ‐る　たも‐つ　／も‐つ
　「十⠛」の右下に「月⠙」を置いた形の文字です。「月⠙」は、「肉⠨」のことで、手で肉を持っている形を表しています。ものがそこにある、ものを持っている、あり続けることを意味します。漢点字では、「⠓　(十)」と「⠑　(月)」で表します。
　「有無」「有識者」「有限会社」「有力者」「所有」「保有」

　（３５）　　存⠛⠺　　ソン　ゾン　　あ‐る　／たも‐つ
　「十（ナ）⠛」の斜め線の下部に交差した縦棒、その右下に「子⠺」を置いた形の文字です。ある、そのままにしておく、保管しておく、という意味を持つ文字です。漢点字では、「⠓　(十)」と「⠺　(子)」で表します。
　「存在」「存続」「存念」「存分」「生存」「実存」

　（３６）　　在⠛⠞　　ザイ　サイ　あ‐る　／いま‐す　おわ‐す
　「十（ナ）⠛」の斜め線の下部に交差した縦棒、その右下に「土⠞」を置いた形の文字です。今の今、そこにある、じっとしている、生きているという意味を持った文字です。漢点字では、「⠓　(十)」と「⠞　(土)」で表されます。
　「在席」「在職」「在任」「在勤」「存在」「現在」「混在」「在り様」「在りし日」

　※　「門⠿構え」のある文字。「門⠿」は、戸の閉ざされた入り口を表しています。下の半分が空間になっていて、そこに色々な文字が部首となって入ります。

　（３７）　聞⠷⠾　　ブン　モン　　き‐く　／きこ‐える
　「門⠿構え」の中に「耳⠷」の入った形の文字です。門を隔てて中の声をきく、あるいはきこえる。評判が立つ、噂がきこえて来るという意味があります。また、香りをかぐという意味もあります。漢点字では、「⠾　(門構え)」と「⠷　(耳)」で表されます。
　「聞香」「新聞」「伝聞」「聞酒」

　（３８）　間⠷⠺　　カン　ケン　ゲン　あいだ　／あい　ま　はざま
　「門⠿構え」の下に「日⠺」が入った形の文字です。元々は「日」ではなく、「月」でした。門の隙間から、月の光が見えていることを表しています。そこから〝あい、あいだ〟の意味が生じました。また、〝ま〟と読んで、時間的な空隙や、家の間取り、部屋、〝けん〟と読んで、長さの単位）一間は六尺（を表します。漢点字では、「⠾　門構え)」と「⠺　(日)」で表します。
　「間隙」「間欠泉」「人間」「時間」「間遠」「幕間」「間取り」「間抜け」「九尺二間の棟割長屋」

（16ページから）レ下がりで部首は国構えに使う。

（2）今回の学習内容　テキスト第二回、漢点字及び第一基本文字を部首とした文字

基本文字が2及び3合わさってできる漢点字。

・木⠲（1・2・6の点）を部首とした文字。

点字p2，墨字p4から

「林⠲⠲」　木が2つ並んだ文字。植物が地べたから生えてきた様子を表す。会意文字。音読みのリンは漢・呉音

「森⠲⠲⠲」　木＋ウ（1・3で3つを表す）。ちなみに「品⠲⠲⠲」は口＋ウ。音読みのシンは漢・呉音。

「材⠲⠲」　才（2・4・5）＋木で表され、偏と旁が反対となった一種の逆転文字。木製品の元になるもの。『木材』は材木にする前の木、「材木」は製材した木。

・相　木＋目（1・2・3・4・5・6）と相を含む文字

「相⠲⠲⠲」　木と目で構成。木をじっと見る、という意味。会意文字。音読みソウは呉音、ショウは漢音。訓読みにすがた、人名にすけがある（広辞苑）。

文字例のほかに、手相、家相や相模（さがみ）、相撲（すもう）など多数。

相模は関八州の一つで、他は武蔵、安房、上総、下総、常陸、上野、下野。

「想⠲⠲」　相＋心（2・5・6、ル下がり）。漢点字では相と心ではなく、木と心の2つで表す（基本的に漢点字は2マスを使うため）。訓読みのおも-うには、他に思、憶、念がある。

・果と果を含む文字

「果⠲⠲」　田（1・3・5）＋木。木の上に田を乗せた形。音読みのカは漢・呉音

因果、成果、結果など果の付く字は多い。

「課⠲⠲」　言偏（1・2・4）＋木。果物の意味（常用字解）、特に柑橘類。外皮を剥くと中身がいくつかに分かれている（房）もの。房には部屋という意味もあり、転じて役所や会社の組織の単位に用いられる。

・休と休を含む文字

「休⠲⠲」　人・人偏（1・3）＋木。音読みキュウは漢音、クは呉音。

「保⠲⠲」　人偏＋口（1・2・4・5）。音読みホは慣用音、ホウは漢・呉音。

・未（1・2・6＋4）を部首として含む文字

「来⠲⠲」　未＋（1・3）旧字の「來」は麦の穂の実った形を表す。音読みのライは漢・呉音。訓読みには「このかた」もある（広辞苑）。

ご報告とご案内

一　本誌『うか』、十二年目に入りました

本誌・機関誌『うか』は、今号から十二年目に入りました。これも読者諸兄姉のご厚情に支えられてのことです。深く御礼申し上げます。

また歴代編集に当たって下さった、あるいは現在お願いしている皆様、表紙絵を描いて下さった、あるいは現在お願いしている皆様、そして印刷・製本・発送の労を執って下さる会員の皆様、本当にありがとうございます。

さらに、視覚障害者向けに音訳の労を執って下さった、あるいは現在お願いしている皆様には、取り分け厚く御礼申し上げます。

本誌では、「漢点字の普及がまだまだ進んでいない」と言い続けて参りましたが、この十年あまりの活動を通して、「普及」というのがどういうことか、どういう状態を「普及」と呼ぶのかということ等を、それに平行して考えて参りました。

その姿も大分見えて来たように思われます。

「継続こそ力」と言い聞かせながら、まだまだ続けて参る所存でございます。

変わりませぬご支援、どうぞよろしくお願い申し上げます。

二　賛助会費のご納入、御礼申し上げます

二〇〇七年度の賛助会費をお納めいただきました皆様に、厚く御礼申し上げます。

ご芳名は以下の通りです。

村田　忠禧様、中村　裕一様、梶浦　千郁様
河村　幸男様、関口　常正様、田崎　吾郎様
高橋　かず様、飯田　みさ様、佐川　隆正様
松村　敏弘様、雨宮　絢子様、平野　桃子様

三　横浜市健康福祉総合センターの工事が終了しました

昨年（二〇〇七年）二月から行っていた健福センターの、耐震並びにアスベスト除去の工事が、この三月を以て終了しました。今月からこれまで通り、市・社会福祉協議会・ボランティアセンターを拠点に、活動を再会します。

この間市社協様には、点字プリンターをお貸し出しいただきましたこと、深く御礼申し上げます。その点字プリンターは、（有）横浜トランスファ福祉サービ

スの事務所に設置させていただいて打ち出し等を行いました。同社には多大なご負担をおかけしました。御礼申し上げます。

音訳者の皆様にも、連絡・受け渡し等、ご不便をおかけしました。テーププリンターも上大岡のウィリングに移設したものを使用させていただきました。ミーティングと漢点字講習会は、みなとみらい地区にございます市民活動支援センターをお借りして行いました。

このような情況下にもかかわらず、この一年あまりつつがなく活動することができました。会員各位のご尽力の賜と、感謝申し上げます。

四　漢点字講習会

横浜漢点字羽化の会では今年度も、五月五日（月、子供の日）を初日に、漢点字講習会を開催致します。隔月に行います。

横浜市健康福祉局、市・教育委員会、市・社会福祉協議会のご後援をいただいての開催です。多数のご参加をお待ち申し上げます。

東京漢点字羽化の会でも同様に、漢点字の学習会を行っています。ご受講は自由です。ご参加をお待ち申し上げます。

編集後記

▼情報化時代の漢字に関して、山内さんが興味ある文章を書いておられます。文化庁の世論調査で八割近くの人が、情報機器の普及によって言葉や言葉の使い方が影響を受けると考えているそうです。そして、その影響というのは漢字が書けなくなるということです。まさしく私自身がそれをひしひしと感じています▼一方で七一％の人が「漢字は日本語の表記に欠くことのできない大切な文字である」と考えているそうですが、逆にいうと、三割近くの人はそう考えていないということでしょうか。日常の簡単な言葉の表現だけなら、漢字なくしてもほぼ意志を伝えることができるかもしれませんが、微妙なニュアンスを文字に表現したいと考える文学作品などにおいては、漢字は絶対に欠くことのできない大切な文字だと思います▼ただ、コンピュータの性能が飛躍的に向上して、どんな複雑な漢字も表現できるようになると、積極的にそれらを取り入れたいという意見を持つ人たちが出てくるでしょう。しかし、もしそういうことになると、「読めるけど書けない文字」が非常に多くなるでしょう。これが文明の進化なのかもしれませんが、何か空恐ろしさを感じてしまうのです。

（木下　和久）

Ｅ－ＭＡＩＬ（岡田健嗣）：　okada_tr_eib@ybb.ne.jp
横浜漢点字羽化の会　ＵＲＬ：http://ukanokai.web.infoseek.co.jp
《表紙絵　　岡　稲子》　　次回の発行は6月15日です。

※本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。